

派遣者番号	R5K30	氏名	山田 美紀
研究主題 —副主題—	小学校キャリア教育実践における教師の意識の変容		
派遣先大学	早稲田大学	指導担当者	三村 隆男
所属	稲城市立南山小学校	所属長	山本 美早

キーワード： 小学校 キャリア教育 校内研究

要旨： 実践校は、校内研究のテーマに「キャリア教育」を位置付け、2年間取り組んできた。「キャリア教育とは何か」「キャリア教育で求められる力とは何か」「求められる力を育成する指導とはどのようなものか」等について、教師間で共通理解を図る機会が十分ではなく、一人一人の受け止め方も様々だったことが課題として挙がっていたからである。

本研究は、校内研究を通して教師間のキャリア教育に対する共通理解を促進し、その過程で生じる教師の意識の変容を捉えることで、今後の小学校におけるキャリア教育の在り方を見出すことを目的に取り組んだものである。

キャリア教育に対する意識の変容をインタビュー調査から明らかにし、整理した結果、以下の六つの意識の高まりが見られた。

1. 学びを職業（仕事）とつなげる意識
2. 他者を知る機会をもつ意識
3. 自分のよさや興味を知る機会をもつ意識
4. 役割を果たす場面をつくる意識
5. 各教科・領域の学びの意義を見つめ直す意識
6. 教師としてキャリア教育の視点をもつ意識

1～4の意識は、キャリア教育の視点として、今後様々な教育活動に取り入れることが可能である。5と6の意識は、キャリア教育の実践を通して得られた教師自身の新たなキャリア形成と言える。

この結果から、「キャリア教育」を教育活動に取り入れる際の視点と、キャリアの教育を取り入れるよさを実感することができた。

## 1 はじめに

実践校では、2022年度から校内研究のテーマにキャリア教育を位置付け、取り組んでいる。筆者は初年度の研究主任として、この研究を牽引する立場にあった。初年度の研究では、一定の成果が認められたが、研究主任としてのキャリア教育に対する知識不足や校内研究を推進する力量不足を痛感した。この状態を改善するため、1年間の教職大学院研修を選択し、外部人材として実践校のキャリア教育研究を支援した。

## 2 小学校におけるキャリア教育

### 2.1. 小学校におけるキャリア教育の位置付け

小学校におけるキャリア教育の必要性が最初に示されたのは、1999年の中央教育審議会答申においてであった。第6章に「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とした。

それから18年が経過し、2017年の小学校学習指導要領の改訂では、総則に「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」とキャリア教育が初めて示された。また、要となる特別活動の学級活動には、内容(3)に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が加えられた。三村(2020)は「学級活動(高等学校の場合はホームルーム活動)がキャリア形成と自己実現をめざす場であり、それは各教科の特質に応じキャリア教育が展開されることで資質・能力を身に付けることができるとの意味をもつ」と述べている。したがって、キャリア教育は独立した教育活動ではないということである。社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を12年間にわたって育成するキャリア教育において、小学校は最初の6年間となる(図1)。小学校におけるキャリア教育実践が、続く中学校、高等学校のキャリア教育の土台づくりを担っているという意識で実践される必要がある。

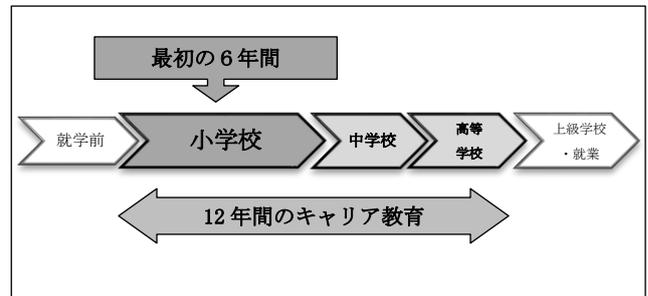


図1 小学校におけるキャリア教育の位置付け

### 2.2. 小学校におけるキャリア教育の課題

2011年の中央教育審議会答申には「キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実践の効果も徐々に上がっている。しかしながら、(中略)一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準に、ばらつきがあることも課題としてうかがえる」と記されている。更に、2020年「キャリア教育に関する総合的研究第一次報告書」においても「学級担任が特に重要性を感じている『具体的な目標設定』『教員間の共通理解の促進』は、いずれも多く和学校において十分に行われていないと判断できる」と記述があり、小学校におけるキャリア教育の必要性が示されてから20年近く経っても、キャリア教育の受け止め方や教員間の共通理解には、課題があることが分かった。

## 3 課題と目的

### 3.1. 実践校の課題

実践校では、2017年の学習指導要領の改訂以降、教育課程において「キャリア教育全体計画」や「各学年のキャリア教育年間指導計画」を作成している。「キャリア・パスポート」にも取り組んできた。また、第6学年においては、キャリア教育の一環として文部科学省も推進する起業体験活動に、2019年度から継続して取り組んでいる。

しかし、「キャリア教育とは何か」「キャリア教育で求められる力とは何か」「求められる力を育成する指導とはどのようなものか」等について教師間で共通理解を図る機会は十分でなく、一人一人の受け止め方も様々であった。こうした状況を打開するため、2022年度から校内研究のテーマとしてキャリア教育を位置付け、取り組むこととなった。

### 3.2. 研究の目的

校内研究を通して、教師間のキャリア教育に対する共通理解を促進し、その過程で生じる教師の意識の変容を捉えることで、小学校におけるキャリア教育の在り方を見出す。

### 4 研究の方法

全6回の研究授業実施後、校内研究に携わった教師にインタビュー調査を行い、その語りを分析する。

### 5 実践研究

本報告は2023年度の内容となるが、2年間を通して研究が実施されたため、2022年度の取組から記述する。なお、小学校におけるキャリア教育の先行実践として、2002年よりキャリア教育に取り組んできた静岡県沼津市立原東小学校の校内研究を参考にした。まだキャリア教育が学習指導要領に登場する前の実践になるが、準備から実践に至る3年間の詳細な記録が残っている（静岡県沼津市立原東小学校ら、2005）。特に、キャリア教育を導入するに至った当時の校長の思いや、実践に携わった教師陣のありのままの言葉が筆者の拠り所となった。

#### 5.1. 2022年度の校内研究

研究主題を「なりたい自分の実現に向けて、主体的に取り組む児童の育成」とし、まず「キャリア教育とは何か」を教師自身が実践を通して考えることから始めた1年目である。これまでの校内研究を基礎として、生活科、総合的な学習の時間、特別活動、自立活動において、計7回の研究授業を実施した。

研究推進委員会を中心に研究構想を練り、授業を組み立てて実践する「低学年」「中学年」「高学年」「専科・特別支援教室」の4分科会と、研究を支える役割を担う「基礎研究」「調査研究」「環境整備」の3分科会を設けた。

##### 5.1.1. 校内研究の構造

校内研究は、以下のような手順で進められた。研究授業の実施学年が決定した段階で、①の研究推進委員会からスタートし、図2のような六つのプロセスを経るサイクルを計7回実施した。

専門家からは矢印で示したタイミングで助言があった。更に、全体での情報共有のために「研究全体会」を実施し、「研究協議会」を充実させるために研究主任が「研究だより」を発行した。

また、このサイクルに関わらず、校内研究における様々な進捗状況を確認するために、適宜研究推進委員会は開かれた。

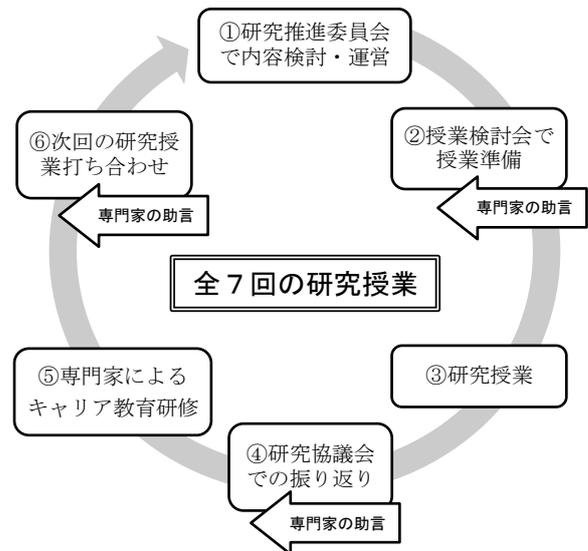


図2 2022年度 校内研究構造図

授業を組み立てる際には、分科会における授業検討と作成した指導案に対する専門家の助言を、何度も繰り返しながら進めた。

##### 5.1.2. 研究授業一覧

実施した7回の研究授業の概要は表1の通りである。

表1 2022年度 研究授業一覧

実施月	学年	教育課程上の位置付け	単元及び題材名
5月	3年	特別活動 学級活動(3)	3年3組おそうじ 大きくせん
6月	5年 ※1	自立活動	すまいるルームを 紹介しよう
7月	6年	総合的な 学習の時間	地域と共に生きる
9月	4年	総合的な 学習の時間	だれもが住みやすい 地域にしよう※2
10月	5年	特別活動 学級活動(3)	たてわり活動を見直し、 よりよい学校をつくらう※3
11月	2年	生活科	せかいでひとつ、 わたしのおもちゃ
12月	1年	特別活動 学級活動(3)	じしゅ学しゅう パワーアップ さくせん

※1…対象は通級指導教室に通う3人である。

※2…単元名の「地域」の部分に、実際は地域名が入る。

※3…題材名の「学校」の部分に、実際は学校名が入る。

##### 5.1.3. 成果と課題

1年目の大きな成果は、校内研究を通して、「キャリア教育とは何か」「キャリア教育で求められる力とは何か」「求められる力を育成する指導とはどのようなものか」等について、教師間で議論できたことである。「キャリア教育」という視点で教師同士が児童の姿を語る機会も校内研究の場に限らず増えた。

また、各実践において、児童が主体的に活動したり、よりよくしようと考えたりする姿を見ることで、キャリア教育の視点を取り入れることのよさも感じることができた。

一方、課題として残されたことは、次の3点である。

1. キャリア教育を実践する際、「基礎的・汎用的能力の育成」が目的化し、その育成の検証などにこだわったため、実践に混乱が生じていた。
2. 議論の機会は増えたが「キャリア教育とは何か」の疑問は解決したわけではなく、準備や実践に時間がかかることへの抵抗感を感じる教師がいた。
3. キャリア教育の要となる特別活動は、教師によってその取組に差があり、学校全体で見直す必要があることが指摘された。

### 5.2. 2023年度の校内研究

前年度の課題を踏まえ、以下の3点に重点を置き、「キャリア教育とは何か」について、新たな実践を通して更に深く考えることとした。

- 1 専門家の助言もあり「基礎的・汎用的能力」は、目的ではなく手段であると捉え、キャリア教育を通して教科等の「資質・能力」の育成を目指す。
- 2 学習指導要領にある「各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」を踏まえ、他の教科等でも実践する。ただし、それぞれ教科等の教育課程を大幅に変更することなく取り組める内容にする。
- 3 学級活動を中心に、特別活動におけるキャリア教育の要としての在り方を見直す。

#### 5.2.1. 校内研究の構造

校内研究の基本構造は、図2に示した2022年度とほぼ変わらず、6つのプロセスを経るサイクルを計6回繰り返した。

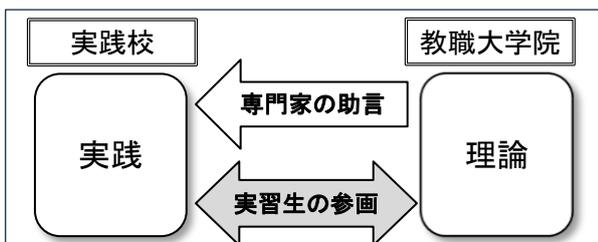


図3 2023年度から加わった実習生の役割

2022年と大きく異なる点は、図3のように筆者が実習生として校内研究に参画し、教師からの疑問や進捗状況を専門家に伝えたり、専門家からの

助言を教師に伝えたりする役割を担った点である。結果として、専門家の助言を得る機会が増え、実践校に即した理論が提供できることとなった。

#### 5.2.2. 研究授業一覧

実施した研究授業の概要は表2の通りである。

表2 2023年度 研究授業一覧

実施月	学年	教育課程上の位置付け	単元及び題材名
6月	4年	国語科	〇〇な新聞をつくろう
7月	5年	特別活動 学級活動(1)	1学期頑張ったね会をしよう
7月	2年	国語科	あったらいいな、こんなもの
10月	6年	特別活動 学級活動(3)	もうすぐ中学生
10月	3年	特別活動 学級活動(3)	係活動を見直そう
12月	1年	特別の教科 「道徳」	みんなのために はたらく

#### 5.2.3. 授業に反映された研究の成果

各授業に反映された研究の成果は以下の通りである(実施月順)。

##### 第4学年 国語科「〇〇な新聞をつくろう」

- ・実際に新聞が作られる過程を紹介した動画や元新聞記者の保護者の話、市の広報担当者の話等から、新聞記者という「職業の専門性」を知ることができるようにした。
- ・保護者が読み手となることで、「相手意識」が生まれ、内容の吟味に視点をもたせた。
- ・「話し合いの約束」を設け「相手の考えを受け止める姿勢」をもたせた。

##### 第5学年 学級活動(1)「1学期頑張ったね会をしよう」

- ・児童一人一人が話し合う意義を感じられるようにし、学級会の中で「役割を果たすこと」ができるようにした。
- ・他者の考えを受け止め、多様な意見を生かし、合意形成できるようにした。
- ・学級での話し合いに留まらず、Y-PLANで都市計画に参加する子供たちのように、学校や地域といった「社会参加」へと広げられるようにした。

##### 第2学年 国語科「あったらいいな、こんなもの」

- ・あったらいいなと思うものについて、「困っている人を助ける」という視点を追加し、誰かにとって「役立つ」という目的をもたせた。
- ・話し手が必要としていることに聞き手が応える(役割を果たす)状況をつくることで「情報リテラシー能力」の基盤を育成した。

### 第6学年 学級活動(3)「もうすぐ中学生」

- ・「進路指導の6活動」における進路情報理解の観点から、中学生(卒業生)へのインタビュー動画を視聴した。
- ・児童の「職業知識を広げる」ために、職業・企業や専門家、保護者による講話を実施した。

### 第3学年 学級活動(3)「係活動を見直そう」

- ・デューイ「子どもの四つの興味」の視点で係活動を捉え直し、児童自身の興味と照らし合わせて活動を選択させた。
- ・「みんなのために」という「他者意識」をもって、活動内容を話し合わせた。

### 第1学年 道徳科「みんなのためにはたらく」

- ・教材文や友達の意見、教師の説話から、利他的動機付けをすることにより、児童が「誰かの役に立ちたい」という思いで自発的に働く意欲をもつようにした。
- ・友達の話聞くことで、「多様な働き方」を知ることができるようにした。

## 6 インタビュー調査の結果と考察

実践に携わった教師23人に、校内研究を経てキャリア教育における「新たな気付き」や「見方や指導法の変化」があったかを質問した。

結果から教師の主な変容を見付け、以下のように分類し、変容の特徴を項目名としている。考察では、項目ごとにその変容の要因を分析した。

### 6.1. インタビュー調査の結果

変容が認められる部分に波線を引いた。波線前の番号は、考察に紐づいている。

#### 6.1.1. 「学びを職業(仕事)とつなげる意識」の高まり

##### 教師A：4年担任・授業者・研究2年目

授業を通して、①学びを職業とつなげる意識が自分の中で高まったように思います。今回の授業では、児童の発言から保護者に元新聞記者がいらっしやるのが分かって、“これは授業につながる”とすぐ判断できました。授業を終えた後も、そういう意識はもつことができますね。

##### 教師B：2年担任・授業者・研究1年目

自分が授業をしていく時に、②今やっていることはどこに繋がるとか、働くという分野だとここに繋がるなどか、考えるようになりました。国語をしていても、算数をしていても。ただ、知識・技能を習得させようとしているのではなくて。

#### 6.1.2. 「他者を知る機会をもつ意識」の高まり

##### 教師C：2年担任・研究1年目

いろんな大人を呼びたいと思いました。③子供たちの視野を広げたいっていうか、いろんな角度からものを見られるようになるんじゃないかって。そしたら、今の失敗なんて大したことないよって分かるだろうから。

##### 【教師D：1年担任・研究1年目】

なんか、キャリア教育って、子供たち同士でよく話し合わせたりして④いろいろな考え方があるんだなって知ること大切なんだなっていうのは思いました。

#### 6.1.3. 「自分のよさや興味を知る機会をもつ意識」の高まり

##### 教師E：特別支援教室担任・授業者・研究2年目

昨年度キャリア教育の研究授業をして、子供たちのキャリア形成を考えた時に、⑤自分の適性というか、良さや得意だと思えることを見付けられるかが大事だと思いました。その為には、いろいろ試してみる力を育ててあげることが小学校段階では必要なのかなと思いました。

##### 教師F：6年担任・授業者・研究2年目

⑥一人一人が、自分にしかできない、その強みとか、良さというのをまず自分自身が分かって、それを集団、将来的には社会の中でいかに発揮するかっていう、⑦役割意識をもたせるっていうところは、キャリア教育の醍醐味ではないかと2年間の実践で私は感じました。

#### 6.1.4. 「役割を果たす場面をつくる意識」の高まり

##### 教師G：管理職・研究1年目

国語科「あったらいいな、こんなもの」の単元では、通常、子供たちが単純に「あったらいいな」と思うものを自由に考えていますよね。⑧そこに『役割』という視点が入ったことで、授業が、何というか、美しかったじゃないですか。「困っている人のために」という相手意識があって、子供たちは真剣に考えていましたよね。それがよくなったって。

##### 教師H：3年担任・授業者・研究2年目

授業が終わってからも、係活動に対する子供たちの意識がものすごく高くて。何だかんだうるさく言っている人ほど、⑨「みんなのために」っていうのをよく考えているし、私も係活動を大事にしてあげなきゃなと思いました。

#### 6. 1. 5. 「各教科・領域の学びの意義を見つめ直す意識」の高まり

教師 I : 1年担任・学年主任・研究1年目

キャリア教育ってよく分かってなかったけれど、⑩国語はここが大事だとか、算数はここが大事だとか、キャリア教育の視点からまた明らかになった部分はあったかなと思いました。国語からだけは考えられなかった新たな視点ももてたかなって。

教師 J : 1年担任・授業者・研究2年目

教科で「資質・能力」は意識していたんですけど、自分には⑪特別活動に「資質・能力」があるという意識が欠落して、よく考えるようになりました。特に学校行事。行事も教育活動なのだという意識に変わりました。

国語の(研究推進委員会の)時に「結局、働く人が登場すりゃいいのか。」みたいな話に1回なったじゃないですか。あれもすごく参考になって。議論を聞いていて、皆さんの。あ、そうだよなと思って。⑫国語には、国語で身に付ける力ってあるんだよねって。だから、それをちゃんとつけないと、と思いました。

#### 6. 1. 6. 「教師としてキャリア教育の視点をもつ意識」の高まり

教師 K : 2年担任・研究2年目

キャリア教育をする前に、まず⑬人としての生き方について、教師自身がよく考える必要があると思いました。それをふまえて、児童が人のためになることについて考えたり、行動したりしたことについて、教師が評価してあげられるように思いました。

教師 L : 6年担任・授業者・研究2年目

今の⑭勉強や生活を何のためにやっているのか、なぜそれが必要なのかを教師が明確にもっていないと、子供が自分に向き合えないのだな、と思った。キャリア教育を本格的にやるとしたら、学校全体のカリキュラムをキャリア教育仕様に変える必要があると思う。

### 6. 2. 考察

教師の変容の要因を、これまでの実践とのつながりから分析した。

#### 6. 2. 1. 「学びを職業(仕事)とつなげる意識」の高まり

新聞づくりに「新聞記者」という具体的な職業を導入することで、児童の変容が起こり、自らの意識も高まって①、学習の質を高めようとしている教師 A。働くことや職業と関連づけることで、今学んでいる国語や算数に価値付けができる②と感じた教師 B。キャリア教育で職業(仕事)を扱うことで、日常の学びと将来とのつながりが、具体的になることが明らかになった。

#### 6. 2. 2. 「他者を知る機会をもつ意識」の高まり

キャリア教育の実践から多様な考えや生き方に触れるよさを感じ③、いろいろな大人に関わることで、児童の視野を広げようと考えている教師 C、話し合いでいろいろな考えに触れる大切さを感じ④、相手の考えを聞くことにあらたな価値を見出した教師 Dの事例から、キャリア教育で他者を知る機会をもつことで、児童の見方や考え方を広げられることが明らかになった。

#### 6. 2. 3. 「自分のよさや興味を知る機会をもつ意識」の高まり

自分のよさを生かして意欲的に活動する児童の姿から、自分のよさや得意なことを見つけられる意義を捉え⑤、いろいろ試してみることの必要性を感じた教師 E、児童が自分の強みを生かしていくことのよさを授業者として実感し⑥、自分を知ることが大切にしようと2年間取り組んだ教師 Fの事例から、キャリア教育で自分のよさや興味を知る機会をもつことが、主体的な取組につながることを明らかになった。

#### 6. 2. 4. 「役割を果たす機会をつくる意識」の高まり

集団で役割意識をもたせることの価値を見出し⑦、社会でもそれを生かせることが大切だという意識をもった教師 F、活動に「役割」が入っただけで、児童の考え方に相手意識が生まれ、その真剣な姿に⑧よさを感じた教師 G、授業で共通理解した「みんなのために」を実現しように係活動で実践する児童の姿から⑨、係活動の意義を捉え直した教師 Hの事例から、キャリア教育で役割を果たす機会をつくることで、相手意識を生み、利他的動機付けとなることが明らかになった。

#### 6. 2. 5. 「各教科・領域の学びの意義を見つめ直す意識」の高まり

国語や算数で大切にしていこう⑩を新たな視点で捉えた教師 I、特別活動の資質・能力を意識し⑪、キャリア教育の要となる特別活動の在り方を考えたり、取り入れたキャリア教育の視点は教科で身に付けるもの無関係ではいけない⑫と気付いたりした教師 Jの事例から、「キャリア教育とは何か」を実践から考えることは、各教科・領域の学びの意義を見つめ直すことにもつながることが明らかになった。

#### 6. 2. 6. 「教師としてキャリア教育の視点をもつ意識」の高まり

2年間の校内研究を通して、人としての生き方や⑬、なぜ学ぶのか⑭を考え、それをまず教師自身明確にもつことの大切さを学んだ教師 Kと教師 Lからは、児童のキャリア形成に取り組むことにより、教師のキャリア形成にもつながっていくことが明らかになった。

### 6.2.7. 教師の変容

教師は、キャリア教育の視点を取り入れた実践に携わることで、児童の変容を感じると同時に、新たな指導観を得ることができた。児童のためにキャリア教育のプログラム開発をしてきた教師だったが、その過程で教育の意義に触れ、自身の高まりも感じることはできたのではないかと思われる。これは、「分からない」と言いながらも、実践し続けたからこそ得られた経験ではないだろうか。また教師Mは、次のように話している。

#### 教師M：管理職・授業者・研究2年目

学習指導要領に書いてある「キャリア教育」だけだと、おそらく実践は進まなかったと思います。それを⑮校内研究というみんなの研究にしたことで、「キャリア・パスポート」であるとか、「キャリア・カウンセリング」であるとか、そういった年間を通じた活動も含めて実践した形になったので、自分の中で「キャリア教育」の意識は高まったかなと思います。あとは、いろいろな先生方の実践を見ることができて、その可能性というのを探ることができたかなと思います。

実践校では研究授業だけでなく、それを支える「キャリア・パスポート」や「キャリア・カウンセリング」等も充実させた。学校全体でキャリア教育に臨んだこと⑮が、授業者だけでなく、教師一人一人の意識を高めたとも言える。

2022年度の課題を踏まえた三つの重点も効果が見られた。1点目の「基礎的・汎用的能力を目的ではなく手段とすること」について、研究主任が次のように話している。

#### 教師A：研究主任・研究2年目

昨年度は本当によく分からなくて、手探りだったなという記憶があります。キャリア教育の「基礎的・汎用的能力」というのは捉え方次第なところがあるので、何をどう教科の「資質・能力」と結びつけるのが正解かどうかを考えていた気がします。今年度は、キャリア教育についても3観点にして考えたので、授業づくりの際も「正解かな？」と悩むことなく、すっきり考えることができました。私は「職業」という視点をもつことや「基礎的・汎用的能力」を教科の資質・能力を身に付けさせるための道具とすることは、キャリア教育を分かりやすく考えられる手だてになるのではと思っています。

2点目の「それぞれ教科等の教育課程を大幅に変更することなく取り組める内容にすること」については、第2学年国語科の実践が分かりやすかったという意見が研究協議や研究全体の振り返りで挙がった。この経験は、キャリア教育に対する抵抗感をなくしたと捉えられる。

3点目の「特別活動におけるキャリア教育の要としての在り方を見直す」については、授業実践と並行して各学年の学級活動年間指導計画を大幅に見直し、2024年度から実施することとなった。

重点を置いた3点を振り返っても、実践校におけるキャリア教育が、前年度に比べて分かりやすく抵抗感のないものになり、その要となる特別活動が機能する準備もできたと言える。

### 6.3. インタビュー調査から見られた傾向

インタビュー調査を更に深く分析すると、教師の意識の変容は、「指導計画を立て、授業分科会で協議し、研究授業を行った」場面に多く見られた。つまり、実践に至る過程で実践者を中心とした学年団にキャリア教育の視点を授業に用いる意識や各教科・領域における学びの意義を見直す変容が起きていることが明らかになった。

専門家の助言も、指導案に対する助言の効果が高く、加えて、授業後に価値付けられる場面で、キャリア教育の意義を感じられるようである。

### 7 成果と課題

実践校では、2年間の校内研究でキャリア教育をテーマにしたことで、キャリア教育に推進する意識が高まった。これによって、12年間のキャリア教育の土台となる教育活動に臨む準備ができたことが大きな成果である。

教師の理解と意識の変容からは、以下「4つの機会」が各教科・領域に取り入れるキャリア教育の視点として有効であることも明らかになった。

1. 学びを職業（仕事）とつなげる機会
2. 他者を知る機会
3. 自分のよさや興味を知る機会
4. 役割を果たす機会

これらの機会があれば、今後も実践校における様々な教育活動を通してキャリア教育の実践が可能になるだろう。

また、教師一人一人にインタビュー調査ができ、校内研究を俯瞰しながら、実践校の大きな変容を確認できたことは、実習生という立場でなければ不可能であったと思う。本研究を通して教職大学院生としての意義も感じることもできた。

インタビュー調査した際には「まだ分からないですけど」「合っているかわからないですけど」「どうやるかっていうのは掴めてないんですけど」等と前置きをする教師が多くいたことから、まだ「キャリア教育とは何か」を掴めず、正解を求めているように感じる。

実践校の取組の価値付けし、継続してキャリア教育に取り組めるような体制を構築することが、今後の課題であると考えた。